


 いわき市立総合磐城共立病院

# 地域医療連携室だより

## ～患者の共通認識を～

いわき市立総合磐城共立病院 副院長 須貝吉樹



この3月に当地域医療機関の種々の職種の方々の協力を得て「いわき院内感染対策協議会」を立ち上げ、第1回の講演会を東北大学大学院の賀来満夫教授（感染制御、検査診断学分野）をお迎えして開催することができました。

高速交通網の発達した現在、世界は狭くなっており世界中の至る所から1～2日でどんな感染症がもたらされるかわからない時代になりました。いわき市には中国に事業所を持ち、社員が日常的に当地と往復している企業が10数社あるとのことです。SARS騒動の時は数人の有熱症例が帰国直後に受

診し緊張感を覚えました。もしSARS発生ということになると、当院のみでは対応が困難で地域の皆さんと一緒に対処しなければ大変なことになると感じました。感染症には地域として対応するのが効果的であるといわれ、この会がスムーズに成立したと考えております。SARSのみならず現在、医療機関を悩ましているMRSA、MDCP（多剤耐性緑膿菌）や近い将来アウトブレイクするであろう高病原性鳥インフルエンザ（H5N1）などについては、日頃から共通の認識を持ち対応することが求められております。これは何も感染症に限ったことではなく、他の領域でも勉強会や研究会を通じて、当院にしかできないこと他院の方が得意なことを明らかにして、技術、器械、設備などに関しても共通の認識を持つことが有効で有機的な病診連携ができるのではないのでしょうか。より緊密で活発な勉強会や研究会を通して、共通の認識を深めてゆきたいと考えております。


**【いわき市立総合磐城共立病院 地域医療連携室】**

電話 0246(26)2250(直通) FAX 0246(27)5258

 URL <http://www.iwaki-kyoritsu.iwaki.fukushima.jp>

 E-mail [kyoritsu@iwaki-kyoritsu.iwaki.fukushima.jp](mailto:kyoritsu@iwaki-kyoritsu.iwaki.fukushima.jp)



## 腎・膠原病科

腎・膠原病科

部 幸 三

### 「病診連携」

腎臓、膠原病科は現在、私と草野友孝先生、大島瑞保先生の3人と少なく、患者数や、救急、重症例が多いことから、医師の増員をお願いしています。

草野先生は当院で研修を行い、短期間ですが、日本の腎疾患医療を牽引している仙台社会保険病院で勉強しており大変優秀です。大島先生は最近大学で博士号を取得しており、最新の治療に意欲を燃やしています。

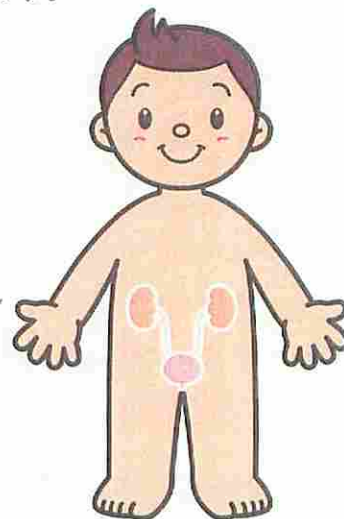
当科の開設は昭和47年に金田浩先生（現かもめクリニック理事長）が赴任して透析を始めたことによります。腎疾患としてSLEの腎症（ループス腎炎）も多く、膠原病も診るようになりました。しかし膠原病は大変広くかつ奥深く、特に近年、関節リウマチに対するメソトレキセートや生物学的製剤の積極的使用が推奨されていることから、膠原病の専門医の増員が望まれます。また膠原病は全身疾患であり、とくに皮膚科、神経内科、呼吸器科医との連携が必要なのですが、当院ではいずれも人手不足の状況です。

腎疾患に対する治療戦略としては

- (1) 早期に発見して適切な治療を行う。腎炎の疑いは、浮腫や無尿等の症状を呈する例は少なく、検診での尿異常によることが多いことから、この時期に腎生検を含めた精査が必要です。IgA 腎症は透析になることの多い腎炎ですが、特に若年例は扁桃腺摘出とステロイドの投与で完全治癒が可能となってきました。またANCA(抗好中球細胞質抗体)関連腎炎は、腎機能の低下とともに発熱やCRPの上昇を生じる全身血管炎ですが、高齢者に多く腎不全の急速な進行とともに肺出血や脳出血を生じ得る重篤な疾患です。これもANCAの測定で診断可能でステロイド等の投与が有効です。糖尿病性腎症は初期からの厳格な血糖、血圧のコントロールでの発症予防が期待されています。
- (2) 慢性腎不全例に対しては低蛋白食やACE-IやARBにより進行を食い止めることが主体となります。鎮痛剤や造影剤の不適切な投与、脱水や過労は腎不全の悪化因子です。
- (3) 末期腎不全に対してはスムーズな腎代替え療法（血液透析、CAPD,腎移植）への移行に心がけています。緊急や夜間の透析導入は危険性も高く、極力避けたいと思っています。腎機能障害の進行を認めたら早めの紹介をお願いします。利尿作用があるとしてスイカを多く取る患者さんがいますが末期腎不全時には高K血症による心停止を生じ得ます。また抗アルドステロン剤の投与も注意が必要です。

高血圧症については循環器内科と重複しますが、二次性高血圧（腎性、腎血管性、内分泌性）の鑑別が大切と考えています。これらは治癒できる場合があるからで、特に若年発症例では注意が必要と思われます。尿検査、血清クレアチニン、K、レニン、アルドステロン、カテコラミン、コルチゾール等の測定で外来でもスクリーニングが可能です。

腎疾患は比較的稀な疾患と捉えられていましたが、生活習慣病の増加や高齢化によりますます増加してきております。膠原病も一歩踏み込んで患者さんを見ると結構多い疾患です。第一線での発見、診療についてよろしくお願い致します。



〈腎・膠原病科医局員〉





## 整 形 外 科

整形外科部長

相 澤 利 武

当院整形外科は1972年、前院長である田畑四郎の赴任により開設され、その後故木田浩が加わり基盤を築きその後も多くの医師の参加をへて現在に至っています。整形外科の診療は多岐に渡り、脊椎（頸椎、胸椎、腰椎）、関節外科（手、肘、肩、股、膝、足）、末梢神経、外傷などがあります。一次的な診療から専門的な加療まで行っておりますが、多発外傷や脊椎損傷や骨盤骨折は救急部に急性期の全身管理を行って頂きながら当科でも加療し、手の血管損傷や腱の損傷は形成外科に対応して頂いております。骨軟部悪性腫瘍については年間の症例が3～4例と少数であり、高度の専門知識や病院としての対応が必要なことから、診断までは当科で行いその後専門病院を御紹介しております。現在5名のスタッフで専門分野を分け3名の大学からの派遣医と協力し対応しております（図1）。スタッフの専門分野と外来日を表1に示します。火曜日と木曜日は手術日であるため当番医の対応となります。休日、夜間の体制はスタッフ数が仕事量に比べ少ないため整形外科医師が当直でない場合は救急外来より必要に応じ連絡を受ける体制になっています。

手術件数は97年以降年間約1,000件であり、2005年度は1,132例、1,171件となっております。膝、外傷を中心に増加傾向にあります（図2、3）。（多発外傷の場合は1例で複数箇所の手術を要するため症例数と手術件数が異なります。）。昨年度の手術のうちわけは件数の多い順から骨折や脱臼に対する徒手、観血的整復固定術が368件、半月板損傷に対する鏡視下半月板切除術や縫合術、前十字靭帯損傷に対する鏡視下靭帯形成術、変形性膝関節症に対する人工関節置換術などの膝関節手術が250件、頸部脊髄症に対する前方除圧固定術や後方拡大術、腰椎の腰部脊柱管狭窄症に対する椎弓骨切り術や腰椎椎間板ヘルニアに対するヘルニア摘出術などの脊椎手術が125件で、腱板断裂に対する腱板修復術や再建術、反復性肩関節前方脱臼に対する関節制動術、拘縮肩に対する授動術など肩関節手術が70件、変形性股関節症に対する人工関節置換術や寛骨臼回転骨切り術などの股関節手術が66件、その他が302件でした（図4）。

当科での手術の特徴は現在の整形外科の先端のレベルの手術を専門医が行っており、全ての分野でより手術侵襲の少ない鏡視下手術を積極的に導入しており、その成績を学会発表し学会誌等に報告しております。

整形外科はQOLの改善が主な目的となるため、入院期間を1週間以内とし検査日や入院日、手術日、退院日をあらかじめ決定しておく短期入院制度を導入し、代表的疾患にはクリニカルパスを導入し医療の標準化をはかっています。

諸般の事情で人的なパワーが足りませんが、当科の特徴を生かして地域医療に貢献したいと考えております。

(表1)

スタッフと専門分野、外来日 (注がない時は午前中)

氏名	専門分野	外来日
相澤利武	肩、股関節	月、水、金 (午後、予約外来)
関修弘	脊椎、末梢神経	月、金
笹島功一	足、骨折	月、水
安永亨	膝、スポーツ障害	月 (午後)、水、金
田中健太郎	股関節、足	月

図2 手術件数の年次的変化

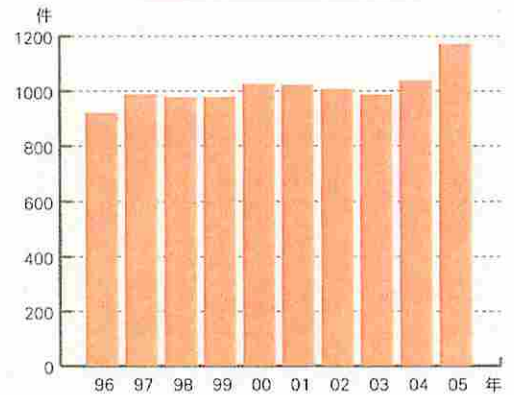


図3 部位別手術件数の年次的変化

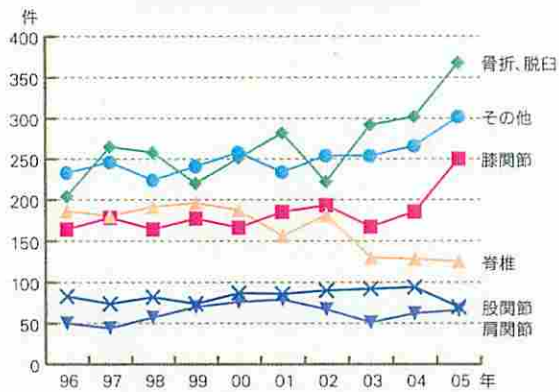
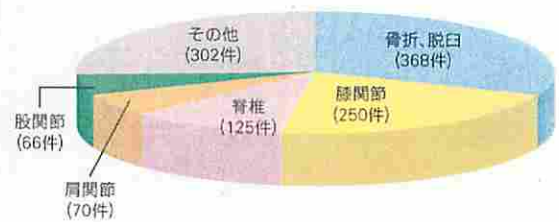


図4 2005年度の手術件数の内分け



〈図1・整形外科医局員〉



## ようこそ! 新任医師紹介



### 外科 ● 根本紀子先生

4月から当院に勤務させていただくことになりました。3月まで北海道にいたので、温かいいわき市を楽しみにしていました。迷惑をおかけしてしまうこともあるかと思いますが、頑張りますのでよろしくお願いいたします。



### 外科 ● 白相 悟先生

4月1日付で当院に赴任となりました。症例も多く、非常に勉強になります。どうぞよろしくお願いいたします。



### 形成外科 ● 市川有希子先生

4月より形成外科で診療しております。土地感もなく、不慣れな点もあり、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、よろしくお願いいたします。



### 小児科 ● 佐野信行先生

中9年、再びいわきに参りました！元気印で楽しく明るく小児外科医療をガンバります。尚、専門はJAZZトランペットです(笑)。



### 脳神経外科 ● 加藤薫子先生

4月より、脳神経外科で勉強させていただくことになりました。仙台より南に住むのは初めてです。いわきでの生活をを楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。



### 放射線画像診療科 ● 石井士朗先生

4月より、放射線画像診断科に勤務することとなりました。いわきで勤めるのは初めてです。皆様に信頼される医療ができるように頑張ります。今後ともよろしくお願いいたします。



### 麻酔科 ● 中楯陽介先生

中楯陽介と申します。今年度3年目になります。スーパーローテートの初期研修終了し、4月から麻酔科として勤務させていただいております。よろしくお願いいたします。

## 未熟児・新生児科 ● 遠藤起生先生

いわき市で生まれ育ちました。  
微力ながら周産期医療に貢献できればと思います。  
どうぞよろしくお願いいたします。



## 糖尿病内分泌科 ● 善積信介先生

4月1日付けで当院赴任となりました。糖尿病内分泌科にて診療いたしております。ご迷惑をおかけする場合もあるかと思いますが、今後ともよろしくお願いいたします。

## 神経内科 ● 馬場 徹先生

はじめまして。  
今期より神経内科に赴任することになった馬場徹です。  
今後ともよろしくお願いいたします。



## 形成外科 ● 松本 剛先生

6年目の松本です。広島生まれのカープファンです。  
休みは野球か格闘技を見に出かけています。  
よろしくお願いいたします。

よろしくお願ひします!!

## 平成18年度 初期研修医 (14名)

設楽 佳彦 (弘前大学)	清水理恵子 (弘前大学)
堀 学爾 (弘前大学)	秋庭真理子 (秋田大学)
黒須 紀友 (山形大学)	諫山 哲也 (東北大学)
重田 昌吾 (東北大学)	野口三太郎 (東北大学)
馬場 一慈 (東北大学)	前嶋 隆平 (東北大学)
吉田良太郎 (東北大学)	山岸 栄紀 (福島医大)
美佐 健一 (筑波大学)	岩淵 悠介 (琉球大学)

## 地域医療連携室からのお知らせ

### 診療申し込みについてのお願い

※ 4月より外来出番表が変更になっております。ご確認のうえ申し込みされますようお願いいたします。

### 腎・膠原病科について

- 希望医の予約枠があいていない場合は希望医または希望日を調整させていただくことがあります。

### 呼吸器外来について

- 月・木曜日は手術日となっており担当医に診療情報提供書を伝達できない状況にあります。月・木曜日の申し込みに関しては火・金に受診日の報告をさせていただきますのでご了承ください。

### 受診前日の申し込み時間について

- 前日の申し込みは祝祭日を除く月曜日から金曜日までの**午後3時**までとなっております。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

### 緊急性のある患者さんについて

- 当該科外来に直接お電話で連絡いただければ対応いたします。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

### 終末期医療について

- 当院では緩和ケア検討会を中心に終末期医療について検討を重ねております。しかし、終末を在宅で過ごしたいという患者さんにとっては、地域の先生方との連携がなければ在宅療養に移行することはできません。終末期医療（在宅療養、看取りなど）に関してご協力いただける先生方を募っております。在宅支援診療所として登録いただける方は、連携室影井までご連絡くださるようお願いいたします。

**FAX番号が変わります**  
(7/15(土) AM10:00~)  
**0246-26-2119**

地域医療連携室業務時間  
月～金 8:30～17:15